

『吉本隆明代表詩選』ノート

松島 浄

—

私は長年吉本隆明の本を読んできて、一九五〇年代の詩集について作者自身が感想を語ることが少ないのはなぜだろうと思っていた。詳しく調べたわけではないが、そんな感想を懐いていた。それが今度『吉本隆明代表詩選』（二〇〇四年）を読む機会があり、そこにおさめられている三人の鼎談を読んで、前からの疑問に一つの回答が出されていることがわかった。今回はこの本の中心でもある三人の鼎談を詳しく批評してみたいと思う。

ここで対象になっている一九五〇年代の詩集とはいうまでもなく『固有時との対話』であり『転位のための十篇』である。いずれも当時の作者が父親から借金して自費出版した詩集だった。結果的にはこれらの詩集によって作者は「荒地賞」を受賞し、現代詩人として認められたのである。実をいうとこの二つの詩集については私自身も一九八二年に「戦後詩と時代精神」という論文を書いて論究していた。そういう意味ではこの論文は「固有時との対話」再説ということでもある。

この詩集くらい有名なのに論じられることの少ない詩集もめずらしい。もちろん第一詩集だから取り上げられることは多かったのだが、その中味について深く分析されることが少ない詩集だったということである。かつて私自身も熱く語った詩集だっただけに、その詩集を作者自身が冷遇している感じがして、意外だったのである。

この間作者自身が詩から批評へと活動の場を大きく転換したこともあり、詩の割合が減少していったのである。その具体的な現象が二〇〇三年の『吉本隆明全詩集』の出版であった。そしてその全詩集の刊行を記念して、「現代詩手帖」が組んだ特集が十月号の「吉本隆明とは何か」という特集号であった。その時の編集後記を紹介すると、「吉本氏の膨大な作品群から、そのエッセンスを提示すべく、三浦雅士、瀬尾育生、高橋源一郎の三氏に〈代表詩〉を選んでいただいた。」

この時の討議が大変興味深かった。三氏の代表詩の選考とそれにもとづく三氏の討議が一読に値する内容だったのである。これは「全詩集」刊行の御祝いな座談会ではなく、白熱したまさに討論に終始したものであった。吉本隆明の詩に関心を持つ人には必見の討議だとおもう。

この時の討議をリードしたのは「三浦雅士」だった。この時の討議の内容についてのちに瀬尾育生は次のようにまとめているので引用してみたい。

「その時三浦さんは吉本は初期詩篇がいちばんいいんだ、あそこには吉本の全部が詰まっているんだと強く主張した。あとの二人はその勢いにあっけに取られるというふうだったのですが、(中略)そのうえで詩作品として「固有時との対話」や「転位のための十篇」の評価には留保を置かざるを得ないと言う。なぜなら、「日時計篇」のなかにあったプライベートな陰影を全部そぎおとして、革命的な当為だけを残しているから。吉本さんが「転位

のための十篇」の刊行の直後に「ぼくが罪を忘れないうちに」という詩を発表したのは、この欠落を償うためだったというのが三浦さんの理解なんですね。」

この主張は吉本隆明の初期の詩について、三浦雅士が相当深い認識に到達していたことをあらわしていた。この主張が画期的であり、十分に検討に値すると思われるが、その後にもあまりとりあげられることはなかったような気がする。この時三浦雅士はこんなこともいつていた。

「吉本さんは一九五〇年にまさに言葉の肉体に触ったということだと思います。そこにはいま瀬尾さんが言ったような外的な状況があつて、キリスト教の問題、仏教の問題、マルクス主義の問題、それから僕の考えではきわめて強烈な恋愛体験と、その結果の婚約をまるでキルケゴールのように破棄してしまつたという重要な事件があつた。一九五〇年の段階でそれが全部一緒に来てしまつたというのが、「日時計篇」から滲み出てきている。吉本隆明における一九五〇年は特別だということがすごくよくわかりました。」

ここで言われている「婚約破棄の事件」については具体的に検証されていないのでよくわからない。ただ三浦雅士が選んだ代表詩の「ぼくが罪を忘れないうちに」のなかに

ぼくは軒端に巣をつくらうとした

ぼくの小鳥を傷つけた

失愛におののいて 少女の

婚礼の日の約束をすてた

という詩があった。三浦雅士はそれを事実と錯覚したのではないかとおもわれる。

二

いうまでもないことであるが、討論に参加した瀬尾育生と高橋源一郎はともに代表詩の中に『固有時との対話』と『転位のための十篇』とをえらんでいた。それに対し三浦雅士だけはその二つの代わりに「転位のための十篇」の翌年に書かれた「ぼくが罪を忘れないうちに」をえらんでいた。その詩に表現されていた作者の罪意識とは以下のような詩句にあらわれていた。

「それから ささが罪だ

ぼくは ぼくの屈辱を

同胞の屈辱にむすびつけた

ぼくは ぼくの冷酷なところに

論理をあたえた 論理は

ひとりでにうちからそとへ

とびたつものだ」

三人の討議者の中でこの詩を選出したのは三浦雅士だけであった。それは彼だけがこの詩を「転位のための十

篇」に対する「アイロニーというか逆説」として読んでいたからである。彼は繰り返し言っている。

「この罪というのは一九五〇年の可能性をねじ伏せてまでも革命的に踏み出さざるを得なかったという、そのときに置き去りにしてきたものに対する罪だと思う」

そしてこの詩の存在を私も三浦雅士に教えられたわけであるが、私としてはここからさらにこの詩の存在価値を追求してみたいと思う。特に「ぼくは ぼくの冷酷なところに論理を与えた 論理はひとりでうちからそへとびたつものだ」まずこの第一の論理を私は「固有時との対話」の「風」のメタファーに読み込んでみたいと思う。そのあとで「内から外へと飛び立つ」形で「固有時との対話」から「転位のための十篇」が書かれたことを確認したいと思う。

つまりこれらは一九五四年当時の作者の世界観（イデオロギー）の表現だったわけである。換言すれば当時の近代的な知識人としての吉本隆明のモダンな世界観の表現だったということである。するとその近代思想を超越した思想の端緒が「ぼくが罪を忘れないうちに」という一九五四年のこの詩ということになるわけで、いわば当時の吉本隆明の早すぎるポストモダンの思想の表明ということになる。

私は先ほどの近代的な知識人の第一の論理を「敵対と闘争の論理」と読む。さらにここで一九八二年に書かれた私の「固有時との対話」についての解釈を引用してみたい。

「風とはなにか？「固有時との対話」を解読するカギはここにあると思われる。風とは歴史である。しかしそれでは拡散し弱い。風とは戦争である。風とは戦争であり革命であった。風とはそれらの意思であった。」

ここに一九四〇年代の学生時代と一九五〇年代の活動家時代との大きな違いがあった。すると初期の代表詩と

もいうべき「固有時との対話」と「転位のための十篇」は作者自身には「罪意識」とともにあったということになる。作者がこの二作についてなぜか言いよんだのもわかる気がしてくるのである。

同時にこの詩にはのちに書かれる「言語にとつて美とはなにか」に展開される「文学的価値についての思想の端緒がのべられている。あるいはこう言い換えてもいいだろう。「共同幻想と個人幻想との逆立の論理の表明ともいえる。」吉本隆明にとつて一九五〇年代がいかに重要な時代であったかということである。

三

この本のタイトルは『吉本隆明代表詩選』である。そこでここで三人の選者が選んだ詩を参考のためにタイトルだけでも引用しておきたいと思う。

高橋源一郎選

- 一 固有時との対話（一九五二年）
- 二 ちひさな群への挨拶・転位のための十篇（一九五三年）
- 三 異数の世界へおりてゆく・定本詩集4（一九五三―一九五七）
- 四 佃渡しで（一九五九年）
- 五 告知する歌・定本詩集5（一九五九―一九六八）
- 六 農夫ミラーが云った

九 十七歳

十 私の本はすぐに終わる・新詩集以降（一九七〇―一九九四）

十一 記号の森の伝説歌（一九八六年）

十二 言葉からの触手（一九八九年）

瀬尾育生選

一 エリアンの手記と詩

二 一九四九年冬・定本詩集1

三 夜のつぎに破局がくる

四 死のむかふへ・手形詩篇（一九五三―一九五四）

五 固有時との対話（一九五二年）

六 火の秋の物語・転位のための十篇（一九五三年）

七 涙が洒れる

八 恋唄・定本詩集4（一九五三―一九五七）

九 記号の森の伝説歌―「比喩歌」（一九八六年）

十 言葉からの触手―「思い違い、二極化、逃避」（一九八九年）

三浦雅士選

- 一 青い帽子の詩・初期詩篇4（一九四六―一九五〇）
- 二 虫譜
- 三 泡立ち
- 四 光のうちとそとの歌
- 五 記憶が花のように満ちた夜の歌
- 六 降誕祭・日時計篇1（一九五〇年）
- 七 視えない花びら
- 八 小さな街で在ったこと・日時計篇2（一九五一年）
- 九 ぼくが罪をわすれないうちに・定本詩集4（一九五三―一九五七）
- 十 「さよなら」の椅子・「野性時代」連作詩篇（一九七五―一九八四）

この三人の選考を読んですぐきづくのは最初の二人の高橋源一郎と瀬尾育生の選出がよく似ているのにたいし、三人目の三浦雅士のそれがまったく違っていることである。そのことがその後の三人の討議にもそのまま反映していて、まれにみる白熱した討論に発展したことである。今回私がこの論文を書こうと思ったきっかけもこの三人の討議の展開の面白さに興味を懷いたからであった。

ところで私自身はこの三人の選考を読んでまた違った発見があった。それは二番目に登場した瀬尾育生が四番

目に挙げた代表詩の「死のむかふへ」という詩のことである。実をいうと私はこの詩をさがしていた。それを今回瀬尾育生に教えられて大変感謝している。それというのもこの詩こそ一九四五年三月の東京大空襲にて死去した吉本隆明の塾の先生だった今氏乙治を追悼した作品だったからである。私はこれまでこの追悼詩を「海はかはらぬ色で」（一九四七年）という長詩を無理やりそうだとやっていたのであるが今度この作品を瀬尾育生に教えられてよろこんでいる。この詩は大変貴重な作品であると思う。吉本さんは恩師の死についても東京大空襲についても多くを語っていないからである。この作品でも「三月」という時期の表現がないと読みそこなうところであった。私はこの詩こそ吉本隆明の代表詩にふさわしい作品だとおもっている。

死のむかふへ

ここは三月の死んだくから

わずかに皮膚をひとかはうちへはいつた意識のなかだ

意識のいりくんだ組織には死臭がにほひ

こはれかけた秩序をつぎあはせようとする風景と

そのなかにじぶんの生活をなげこまれながら

はるかに重たい抗命と屈辱とをかくまった べつの

意識が映る

ほくたちの意識を義とするものよ

それはどこからきてほくたちと手をつなぐか

それは海峡のむかうの硝煙と砲火のあるところからか

またそれはヨオロッパのおなじ死臭のなかからか

それはおなじ死臭の

べつな意味を

死んだ国のなかでつくり出さうとするものからか

死んだにつぼんよ

死んだにつぼん人よ

おまへの皮膚のうへを砲をつんだワゴンがねりあるく

おまへの皮膚は恥をしない空洞におかされている

おまへの皮膚から屈辱がしんとうしてゆく

やがてお前の意識はふしよくされた孔から

じつに暗い三月の空をのぞくだらう

はるはめぐってきて

にんげんをさらってゆくのであるから

ところどころ空はうたがいぶかく晴れて

おまへの屈辱をあきらかにしている

おまへの屈辱をゆくりなくめぐってくるものと

とりかへるな

おまへの屈辱をかくじつにあるべき未来と

とりかへよ

おまへはじつに暗いとおもふ三月の空から

はるかに底のほうにあるにつぼんといふ土地をかんがへよ

しゅうかいなビルディングのなかでおこなはれる

ペテン師のたそがれた合唱をかんがへよ

板のうへでとられるみそづけの晩餐をかんがへよ

重役のやうな芸術家が

ルムベンのような芸術病青年をやとっている

げいじゅつの市場をかんがへよ

おまへはおまへの意識をひとこまづらせば

そんな風景のなかでかんがえることになる

この詩でも後半になると「アジェーション風」の詩句が見え隠れするところが気になるが、自分の戦争体験を思想化しようとして悪戦苦闘している当時の作者の姿勢が表現されていると思われる。同時期の「手形詩篇」にあったもう一つの作品を紹介してみたい。

緑の季節と蹉てつ時刻

ここにひとつの黙示があつて

緑を噴き出す季節のなかのビルディングや運河の

暗い路のあひだを彷徨する

それをみたのはおれとおれの蹉てつだ

黙示にはふたつのことがしめされている

にんげんの希望を踏みくたく

フィナンツのキャタピラの無限の行進と

それをばばもうとするにんげんの意思について

いま路上でおれの出遇ふのは

ただこれだけだ

街樹のなかに夢が堕ちて

緑はくろい炎となつて燃えあがる

正銘の戦火のほかに

かかる異質の炎がある

おれはそれを視て おれはそれをひとに語れない

(中略)

これは吉本隆明の数少ない戦争体験の詩であると思う。

あるいは作者が体験した東京大空襲の詩でもあると思う。

そこには「黙示」と「蹉跌」という言葉が重くのしかかっている。

戦後十年間は生活を再建することと戦争をいかに乗り越えていくかの十年間で在ったということであろう。

四

ところで討議のタイトルにもなっている「豊かさの重層性」とは何のことだろう。この言葉は討議の後半に、一九八六年に出された『記号の森の伝説歌』についての議論の中で出てきた話であった。この時の問題提起者も三浦雅士だった。

「ぼくは『記号の森の伝説歌』はポストモダンにおける詩を真正面からやるといふ風に宣言している詩集だともった。(中略) ここには「記号の森」と「伝説歌」という二つの要素があつて、つまり「記号の森」は状況というか現在という水平性で、「伝説歌」はそれに対する垂直性なんです。垂直性に関して瀬尾さんの言うこれは「母型論」に収斂するというのは当たっていると思う。(中略) 「固有時との対話」を書いた吉本隆明、「転位のため」の十篇」を書いた吉本隆明がポストモダンに對峙しなければならぬ、それがマス・イメージ論やハイ・イメージ論だったわけだけれど、それに対して、あえて詩の言葉で接していった場合にどうなるかというその一つの回答という感じがする。

ここで三浦雅士が言っている二つの要素とはひとつは状況という現在性(外部性)と他方の潜在している内面性(エロス性)とが混合して表現されているということである。それを「比喩歌」から引用してみると、

(中略)

木の雫からは

木の泡をのむ

もう分倍河原のいくさ場に

陽が沈みかかる

姉が死にちかい結核療養所「厚生荘」

やっと先陣を切り抜けてきた

「京王」の時刻表に間にあうだろうか

血のりををすすぐと姉の首すじが

遠くあおい河原をとおって

枝ぶりのように霞んでいる

木の泡で墨をする

うまく夕星を詠んでいた

棺の深さから

水を汲みあげる

過去の井戸 さておいて

椋鳥たちの乗った電車を待つ

たしか三番線

先頭の老人専用車に

「ヤナギダ」という髭の椋鳥

「クニキダ」という痩せた椋鳥

高架線から降りてきたばかりなのに

もう眠っている

姉がけむりになって

世を辞するのだという

夢をみている

またいくさ場か

ゲーム・アンド・ウォッチをポケットにしまいこんで

「聖蹟桜ヶ丘」を降りてゆく いまは

木の泡として

(中略)

ここには現代のゲーム感覚の場面の中で、戦後すぐに結核で死んだ作者のお姉さんのことが重層的に表現されている。冬の多摩丘陵の療養所を弔問に行った作者の心情がまるで「銀河鉄道の夜」の風景のようにえがかれている。

ここで「詩的喩について」語るのはふさわしいとおもわれる。

ここでも発議者は三浦雅士だった。

「三浦（中略）僕は「固有時との対話」は圧倒的に喩の問題だともう。

高橋 ちよつと違うんじゃないですか。

瀬尾 あれは喩ですかね。僕は違うとおもうな。

三浦 その後の「転位のための十篇」にしても、要所要所に明らかに喩的なものが登場している。

瀬尾 そういふふうに言う人は多いんですよ。吉本さんの詩は所詮メタファーの詩じゃないか、（中略）」

ここで再度私が一九八二年に書いた「固有時との対話」についての読解の文章を参照してみたい。

「けれどわたしがX軸の方向から街々へはいつてゆくと 記憶はY軸の方向から蘇ってくるのであった それで脳髓はいつも確かな像を結ぶにはいたらなかった 忘却という手易い未来にしたがうためにわたしは上昇または下降の方向としてZ軸のほうへ歩み去ったとひとびとは考えてくれてよい」（中略）

これについての私の解釈はこうであった。

「例えば、作者が右翼テロリストとして戦争にはいつていけば、記憶はあたかも都市のブルジョア化したインテリゲンチヤの方向から蘇ってくるため、いつも確かな自己同一化のイメージを結実するに至らなかったので、ある時は宗教的幻想の領域や科学的考察へと向かい、ある時は日常生活の過程そのものへと下降していったのである。」

このように私は当時「固有時との対話」を全く喩として読んでいたのである。

『吉本隆明代表詩選』ノート

参考文献

- 一 高橋源一郎他『吉本隆明代表詩選』（思潮社・二〇〇四年）
- 二 松島浄『詩と文学の社会学』（学文社・二〇〇六年）
- 三 吉本隆明『吉本隆明詩全集④』（思潮社・二〇〇七年）
- 四 瀬尾育生『吉本隆明からはじまる』（思潮社・二〇一九年）
- 五 吉本隆明『現代詩手帖』（二〇〇三年・九月号・「わたしのものではない固有の場所に」）
- 六 現代詩手帖・二〇〇三年・十月号・『吉本隆明とはなにか』